

Ⅲ 管理作業

1 エサ寄せ

エサ寄せは乳牛にもっとエサを食べてもらうために行う作業です。エサを食べてもらうことで乳量が増え、収入につながります。

(1)エサ寄せのタイミング

エサ寄せは、乳牛が「食べたい」と思う時に飼槽にエサが置いてあるようにすることが重要です。飼槽にエサがあるのに口元に届かなければ意味がありません。飼槽にあるエサの状況を見てエサ寄せを行いましょ。そして、乳牛の食事は1回当たり20～30分、1日10～12回くらい食べると言われ、搾乳直後にエサを欲しがるといわれる行動が多いことが分かっています。1日の作業スケジュールと見合わせながらエサ寄せの計画を組み込んでいくことが必要です。エサが乳牛の口に届かなくなる前にエサ寄せを行いましょ。



写真1 エサは届く位置にあることが重要



写真2 時間とともにエサの山は前方へ

(2)エサの寄せ方

エサの寄せ方はただ押しつけるのではなく、下になったエサ（乳牛の口に触れていない新鮮な面）を上を被せるように寄せることが重要です。下になったエサを上を被せることで、配ったばかりのエサと思い「食べたい」行動を刺激します（写真3・4）。



写真3 ただ押しだけでなく



写真4 反転させながらエサ寄せを行う

(3)エサの盛り方（山の作り方）

エサを寄せる時は、どの位置にエサを盛るか、山を作るかを考えて行います。乳牛の立ち姿から自然に首をおろした口元にエサを盛ることが重要です（写真5）。飼槽壁から少し隙間を空けてエサ寄せを行いきましょう。



写真5 位置が丁度いい。体を真っ直ぐにして食べている



写真6 エサの山の位置が近すぎて体を曲げて食べている

(4)エサの異物除去

エサの中にはビニールの破片や石、土、カビなどが混入している場合があります。

石、土、カビを食べてしまうと、乳房炎、腸炎及び蹄病などの原因になります。エサ寄せの作業をしながらエサの中を観察し、見つけた場合は速やかに取り除くことが重要です。

また、機械などでエサ寄せをする場合は土砂を持ち込んだり、飼槽をタイヤなどで踏んだりしないように注意しましょう（写真7）。



写真7 異物混入とタイヤの跡

2 除ふん

除ふんは牛床・通路を清掃し、牛体の汚れを防止するために行う作業です。牛床・牛体を清潔に保つことは乳房炎等の疾病を予防することにもつながります。

(1)牛体の衛生を保つ必要性

除ふんを適切に行い、牛床を清潔で乾いた状態に保つことは、牛体衛生を高め、牛のストレスを少なくします。（写真8）

乳牛は起立直後にふんをする性質があるため、そのタイミングでの除ふん作業が効果的です。たとえば給餌やエサ寄せのときは、一斉に立ち上がるため、その時点で除ふんを行います。



写真8 牛体の汚れはストレスのもと

(2)乳房炎予防

乳房炎起因菌は乳頭口から侵入しますので、乳房を汚さないことが重要です。牛床・牛体の汚れは、特に大腸菌などの環境性乳房炎起因菌の感染リスクを高めます。

乳房炎予防のため、除ふん後に牛床専用の石灰資材を散布することも効果的です（写真9）。



写真9 牛床後方に衛生資材を散布

(3)牛床をふん尿汚れから守る

カウトレーナーは、排尿時に背中を丸める牛の習性を利用し、ショックで牛を後退させることにより排泄位置をコントロールするものです（写真10）。

カウトレーナーの効果を最大にするためには、牛の排尿時の姿勢を観察し、設置位置を牛ごとに調整することが必要です。カウトレーナーの高さ（牛の背中和カウトレーナーの間）は拳一つ分程度とします。

新しいつなぎ牛舎では、前後の位置調整が可能なカウトレーナーが設置されているところもあります（写真11）。



写真10 カウトレーナー



写真11 乳牛の体型に合わせた微妙な位置調整が可能なカウトレーナーがあります

(4)牛体の衛生度を確認

除ふん作業が適切であるかどうか、牛体の衛生度合で判断しましょう。

ただし、牛体の衛生度合は、除ふん作業以外の施設要因や敷料管理によっても左右されますので、改善には総合的な対策が必要な場合もあります。

牛体の衛生度合のうち、特に留意したいのは乳房の汚れですが、乳房は尻尾や後肢の汚れによっても影響されますので、後躯全体が綺麗かどうかで判断しましょう（写真12）。

乳房

後肢

目標とするレベル

汚れに課題あり



写真12 牛体の衛生度をチェック